Ch. 1　The Michelangelo phenomenon in close relationships.
親密な関係におけるミケランジェロ現象について

Caryl E. Rusbult, Madoka, Kumashiro, Shevaun L. Stocker, and Scott T. Wolf. (2005)
In Abraham Tesser, Joanne V. Wood, Nad Diederik A. Stapel (Eds.) *On building, defending, and regulating the self; A psychological perspective.* New York; Hove, Psychology Press.

Rep. 小森めぐみ[1].

Rusbult(左), Stocker(中), Wolf(右).

ミケランジェロ

映画「ザ・エージェント(Jerry Maguire)」より...

- 金儲けのことばかり考え、スポーツへの愛情を失った代理人 Jerry が、自分の理想を取り戻し、苦難を乗り越え、自分の理想を追求していく物語。理想自己の追求は苦難を伴う場合があること、理想の追求は一人きりで行われるものではないことを示唆
  - ⌘ Jerry をとりまく3人の人物(仕事仲間で元婚約者の Avery、部下で後に妻となる Dorothy、唯一のクライアントとなる Tidwell)が、ミケランジェロ現象の説明に適当

本章の流れ

- 本研究の基盤となる伝統的研究（**行動確証**、**相互依存**、**セルフディスクレパンシー**）のレビュー
- ミケランジェロ現象の説明と実証研究の紹介。**パートナーによる肯定化**（他者の”best selves”を引き出すことを目的とした考えや行動のこと）という概念が中心。
- ミケランジェロ現象の理解に関連する自己とパートナー関連のプロセスにも言及
- パートナー確証、自己拡張プロセスとミケランジェロ現象の違いを説明

本書の主張：ミケランジェロ現象は、自己だけでなくダイアドにも良いものをもたらす

理論的な背景 (P. 2)

- 自己の少なくともある部分は対人関係の経験によって影響をうける
- 中でも親密なパートナーからの影響は非常に大きいが、それには良いものと悪いものがある

行動確証プロセス

行動確証：相互作用相手が自己に対して抱いている期待が、期待に沿うような自己の行動を導き、結局期待が実現すること(Darly & Fazio, 1980; Harris & Rosenthal, 1985)

- パートナーは自己への期待に沿って行動することで、自己が期待に沿わない形の行動をとることを妨げる。その結果、自己はパートナーの期待通りの行動をとるようになる

[1] 一橋大学社会学研究科

- 自己知覚も他者の期待と一致するという知見もあり(Fazio, Efferin, & Falende, 1981; Murray, Holmes, & Griffin, 1996)
  - ⌘ Jerry は自分の理想に気付く以前は、同僚に無慈悲・狡猾・表面的と思われており、交渉を有利に進める為に手段を選ばなかった

相互依存プロセス[2]

- 相互依存理論によると、進行中の親密な対人関係において、確証過程は強く働く傾向にある。
- 関与が深まるにつれ、その相互作用特有だった適応が、安定的な傾向性や習慣に体現されていく(Kelley & Thibaul, 1978; Rusbult & Van Lange, 2003)
- 自己がパートナーに合わせていく過程は、適応(adaptation)と呼ばれる
- 親密な関係にいるパートナーは、自己の行動や傾向性のうち、望ましいものを促進し、そうでないものを阻害するような行動をとる
  - ⌘ Jerry は自分の理想に気付く以前は、その時点での婚約者であった Avery から強く影響されていた。Avery は Jerry の温かさ、優しさを軽蔑。彼女との付き合いを続けていくうちに、Jerry の優しさはこそげ落とされ、彼は Avery の期待通りの不誠実で皮肉屋の人物に変わっていった

セルフディスクレパンシープロセス

ミケランジェロ“私は叡知に導かれて、石の中にひそむ芸術作品を取り出しているに過ぎない”

(Gombrich, 1995)

- ミケランジェロの言う、岩の隠れた理想の形は、人間の持つ理想自己と重なる(Higgins, 1987, 1996; Markus & Nurius, 1986)
- 人間も同様に、自分の中に理想の形＝**理想自己**をもっており、その理想と今の自分＝**現実自己**とのずれに悩み、現実自己を理想自己にちかづけてずれを解消しようと努力する
  - ⌘ Jerry の姿は、本人の理想(仕事を愛し、自分を愛す)とあまりにも異なっていたため、彼は悲しみやフラストレーションを感じ、理想を追求していこうと考えはじめる

ミケランジェロ現象とその結果 (P.４)

彼女は数年前にフローレンスで目にしたミケランジェロの彫刻のことをよく思い出した。彫刻は石の塊の中に隠されていて、芸術家が不要なものを削り取ることによってのみ、表面的にはぼやけていても、滑らかでほっそりとした理想の形が出てくることができるのだ。彼女とイワンとは互いにとってのハンマー・彫刻刀だった。Lynn Sharon Schwartz, Rough Strife(荒々しい闘い)

パートナーによる肯定化 vs. パートナーによる非肯定化

パートナーによる肯定化(Partner affirmation)：自己の目標追求にパートナーが味方となる程度
パートナーによる知覚的肯定化:パートナーの自己に対する知覚が、理想自己と一致している程度
パートナーによる行動的肯定化：パートナーの自己に対する行動が、理想自己と一致している程度

[2] 相互依存性とは、相互作用する個々人が互いの選考、動機、そして行動に及ぼす影響の強さと質を表す。

ミケランジェロ現象：パートナーによる知覚的肯定化がパートナーによる行動確証を促進し、それが理想自己へ近づくための自己の行動を招く（see Figure 1.1）

⌘ Dorothy は大事な打ち合わせで Jerry の金儲けへの衝動を抑え、理想像に一致するような行動をとるよう会話を導いていく。Dorothy との関係を続けていくうちに、Jerry は自分が望んでいたような親切で他人を思いやることのできる人物に近づいていく

パートナーによる肯定化の失敗

・ パートナーの自己に対する知覚や行動が自己の理想と相反している場合や無関係の場合、パートナーによる肯定化は失敗し、パートナーによる非肯定化が生じている

⌘ Avery は、Jerry は計算高くて負けず嫌いな人間だと思っており、彼にロッククライミングを薦めることで、彼の計画性やリスク嗜好を高めようとした。Jerry は彼女の勧めに応じた行動をとるが、彼女と自分の理想がずれていることに気づき、失望する

パートナーによる肯定化と理想の追求仮説を実証的に支持する研究 （see Table1.1）

二つの予測

(a)パートナーによる肯定化仮説：早期のパートナーの知覚的肯定化が、その後の行動的肯定化を予測

(b)理想への前進仮説：早期のパートナーの行動的肯定化が、その後の理想への自己の前進を予測

自己報告測度を用いた検討(Drigotas et al., 1999; Rusbult, Kumashiro, Finkel, et al., 2003)

・ 異性の付き合い、結婚の縦断的な研究を実施し、***パートナーが自己をどのくらい知覚上／行動上肯定化しているか、自己がどのくらい理想自己に近づこうとしているか***の二点を測定

⇒予測に一致する結果

※自己報告バイアスによる代替説明却下のために、第三者である友人のデータをとり、比較した。その結果、自己報告バイアスの可能性否定。ミケランジェロ現象が自己以外の人々＝パートナー、第三者となる友人側からも明白であることがわかる

属性評定を用いた検討(Drigotas et al., 1999)

・ 25 の属性を**4つの観点**に基づいて評定、**評定の被験者内相関**を調べる⇒予測に一致する結果

(1) 自分は備えているか	パートナーの知覚的肯定化
(2) 備えていることは理想的か	（パートナーの*知覚*と理想自己）
(3) パートナーは自分が備えている	パートナーの行動的肯定化
と思っているか	（パートナーの*行動*と*理想*自己）
(4) パートナーはその属性を行動的	理想自己との近さ
に引き出しているか	（*現実*自己と*理想*自己）

カップルの相互作用評定を用いた検討(Rusbult, Kumashiro, Finkel et al., 2003)

・ 被験者夫婦に重要な個人の目標について話しあってもらい、それを録画。後で被験者自身と訓練をうけたコーダーが、*パートナーは目標追及を助けたかどうか*、*本人は目標に近づいたか*等を録画を見ながら評定⇒予測に一致する結果

実験的手法を用いた検討(Rusbult, Kumashiro, Finkel et al., 2003)

・ “デートする可能性のある相手からの情報“と称して受け取った**情報**をもとに、パートナーが備えていると思われる属性を評定⇒予測に一致する**結果**

相互作用後に理想自己へ近づけると思う程度は
*理想*自己一*致*情報＞*無関連*情報、*脅威*自己一致情報

被験者の理想自己と一*致*する情報
被験者の理想自己と*無関連*の情報
被験者の*脅威*自己と一致する情報

個人の well-being とカップルの well-being

なぜ、ミケランジェロ現象は個人の well-being とカップルの well-being を促進するのか？

個人の well-being についての検討

・ 個人的な成長は人間の原初的な欲求であることは、昔から指摘され続けている(e.g., Freud, 1923 の ego ideal; Rogers, 1961 や Malow, 1962 の自己実現、Bowlby, 1969 の探索概念)
・ 現代の動機理論でも自己決定と個人的成長は重視されている(Deci & Ryan, 2000; Emmons, 2003)。
・ 理想自己への接近は、個人的成長欲求の充足につながると共に、人生への満足感や心理的な適応にもつながる(Higgins, 1987)

カップルの well-being についての検討

・ パートナーによる***知覚的***肯定化は、共感的理解を導き(Ickes, Stinson, Bissonnette, & Garcia, 1990)、愛情を促進
・ パートナーによる***行動的***肯定化は、理想自己追求における自己とパートナーの同調(Rusbult & Van Lange, 2003)、優れた関係調整、追求からもたらされる満足感(Deci & Ryan, 2000; Emmons, 2003)に寄与する者としてのパートナーの高評価につながる

Well-being 仮説を実証的に支持する研究 (see Table1.1)

個人的 well-being 仮説の検討

・ 自己報告：理想自己への前進を答える自己報告測度は、自尊心、自立、有能さ、主観的 well-being に正の相関を示し、前進していくことは主観的 well-being を増加させる一方、理想自己からの乖離はうつ傾向と相関(Kumashiro, Rusbult, et al., 2003)
・ 相互作用：目標関連の相互作用の研究では (前述の録画の研究)、夫婦によるオンライン評定とコーダーによる相互作用中の目標関連のポジティビティは、主観的 well-being と正の相関 (Rusbult, Coolsen, et al., 2003; Rusbult, Kumashiro, Finkel, et al., 2003)

カップルの well-being 仮説の検討

・ 理想自己追求を答える自己報告測度は、DAS(the Dyadic Adjustment Scale; Spanier, 1976)と正の相関を示した
・ 録音の研究では、(a)日常生活における理想への前進測定(b)目標関連の相互作用におけるオンラインの自己報告(c)心理的調整を検討した縦断的研究からのデータ(Drigotas et al., 1999; Rusbult, Coolsen, et al., 2003; Rusbult, Kumashiro, Finkel et al., 2003)も一致する結果が得られた
・ 実験的検討でも、理想自己条件は他の二つの条件と比べて、パートナーを好きになって、楽しく相互作用できるだろうと予測がされていた(Kumashiro, Wolf, et al., 2003)

☆理想自己への追求は、関係の調整だけでなく、カップルの well-being 指標にも正の相関を示していたことは特筆に価する(Drigotas et al., 1999; Kumashiro, Rusbult, et al., 2003; Rusbult, Coolsen, et al., 2003; Rusbult, Kumashiro, Finkel, et al., 2003)

<u>要因の一時的な帰結に関する実証的検討</u>

実証的検討は図1－1のモデルを支持しているか？

<u>媒介分析での検討</u>

(a) **パートナーの行動的肯定化**は、**パートナーの知覚的肯定化**と**自己の理想への前進**を有意に(そして完全に)媒介

(b) **自己の理想への前進**は、**パートナーの行動的肯定化**と**個人的+カップルの** well-being を有意に(ただし一部のみ)媒介

(c) いくつかの研究では、**パートナーの行動的肯定化**(“well-being へむかう途中”)は、**自己の理想への前進**(“実際の wellness”)と同程度またはそれ以上に**カップルの** well-being を予測

<u>縦断的研究の分析</u>

(a) **早期の肯定化**は、時間経過後の**自己の理想への前進**を予測

(b) **早期の肯定化**と**自己の理想への前進**は、時間経過後の**主観的** well-being と**カップルの調整**を予測

<u>実験研究の分析</u>

・ **パートナーによる肯定化**は、**個人的** well-being と**パートナーへの魅力**を促進

<u>潜在的な交絡要因に関する実証的検討</u>

モデルは第三要因の影響を受けていないか？

・ 影響を与える要因として、**高自尊心**(Murray et al., 1996)、**うつ傾向**(Gotlib & Whiffen, 1991)、ムードや満足のレベルによる“**感情の収束**(emotional convergence)[3]”などがあげられる

・ しかし、これらの影響を統制した分析を行っても、ミケランジェロ効果の要因の影響は有意に見られ、従属測度との連合は第三要因よりも強かった(see Table 1.1)

自己のプロセスとミケランジェロ現象(P.12)

君がほかの誰かをどれくらい愛してるかだけじゃない。その人たちといるとき君が誰なのか、それが問題なんだと思うようになってきたんだ。Ann Tyler, *The Accidental Tourist(偶然の旅行者)*

<u>自己の理想：石の塊とそこに眠る形状</u>

[3] パートナーのネガティブムードが相手のネガティブムードにつながり、目標関連の行動が阻害される(Isen, 1999; Karney & Bradbury, 1995)

- ミケランジェロ現象のモデルでは、人には獲得したいと思う理想自己像があることを仮定する。それは認知や行動の枠・指針となり、人はその理想自己と現実自己とのギャップをうめようと動機付けられている(Higgins, 1987, 1996)
- ミケランジェロ現象で追及されるのは**理想自己**であって、**義務自己**ではない。本節では以下の仮説を検討する
  - (a) **理想自己**の追求は憧れが中心だが、**義務自己**の追求は社会的責任が中心
  - (b) **理想自己**の追求は高揚感をもたらすが、**義務自己**の追及は安堵をもたらす
  - (c) **理想自己**からの乖離は落胆につながるが、**義務自己**からの乖離は、不安につながる

理想自己の起源と進化

- 理想自己は個性記述的(idiographic)で、個人特有の形式をもち、内容は人によってさまざま
- 理想自己の起源に関しては、以下の３つの特徴をもつ増加的なモデルが想定される
  - (a) 理想自己は突発的に発生するのではなく、段階をふんで発展していく
  - (b) 理想の登場と修正にはシステマティックな過程とオートマティックな過程が含まれる
  - (c) 理想自己は時間と共に姿を変える場合がある(Higgins, 1987; Markus & Nurius, 1986)
- 理想自己の追求は若いうちにだけ起きるように思えるが、おそらくそうではない。
  - ➢ 実証的には未検討だが、年齢やライフステージは今までの知見には影響しないと予測される。追及する目標の内容はかわっても、理想を実現させようとする欲求は、人類の普遍の関心事
- 理想自己の内容は自己だけでなく、周りの人間の影響も受けて発達していくもので、やはりシステマティックな過程とオートマティックな過程が含まれるだろう
  - ⌘ Jerry の父は息子がなりたいものについて思いを馳せ、特定の目標追及をするよう意図的に励ましたかもしれない。しかし一方で、それは偶然行われたのかもしれない。父は Jerry の5歳の誕生日に野球のボールをプレゼントし、Jerry はそれがきっかけで運動に目覚めたが、父は単に二人で遊べるものを選んだだけかもしれない。

彫り出し過程における自己の役割

理想自己への前進と関連のある自己の要因は何か？

- ミケランジェロ現象の理解と関連が深いのは、自己の**洞察**、**能力**、**動機**の３要因。どのひとつが欠けても理想への前進はうまれないと考えられる。Table1.2 はこの視点に基づいた研究の分類

①洞察の影響

- 現実自己、理想自己についてはっきりした construal がない場合、理想自己への前進は生じない(Campbell, 1990; Swann, 1990)
- この領域の研究はまだ始まったばかりだが、理想への前進についての自己報告やパートナー報告の測度は、自己明確性(self-clarity)と正の相関(Table1-2)

②能力の影響

- 理想を実現させるために必要な能力・スキルや理想と現実のギャップが大きすぎないことが大事
- 自分の目標と理想についての効力感にもとづいて、効果的な戦略(Bandura, 2000; Deci & Ryan, 2000; Mischel et al., 1996)がたてられる
- 実現過程における自己の制御資源（自己統制傾向や状況特有の資源枯渇）も重要

・ 理想への前進についての自己報告やパートナー報告の測度は、能力、mastery、自己統制、目標獲得の可能性知覚と正の相関 (Table1-2)

③動機の影響

・ 達成困難な理想自己に対しては、目標へのコミットメント、遅延報酬への inclination、適切な自尊心が必要(Bandura, 2000; Mischel et al., 1996)
・ 理想への前進についての自己報告やパートナー報告の測度は、自尊心、自己尊敬、達成志向と正の相関を示している(予防志向とは負の相関)(Table1-2)

<u>パートナーの影響をひきだす自己の能力</u>

(a) 自己の理想をパートナーに明確に伝える能力(b)理想自己追求に寄与するパートナーの能力やスキルをひきだす能力(c)自己の理想を叶えたいというパートナーの動機を高める能力

⌘ プロとしての見通しが真っ暗になったとき、Rod Tidwell は攻撃的に Jerry の肯定化をひきだした。"You bet on me like I bet on you!"

・ パートナーによる肯定化の受容は、自己とパートナーが理想について話す頻度だけでなく、自己の愛着の安定化、肯定化への感受性の強さ、肯定化への感謝の表現とも正の相関を示した。(Table 1,2 elicitation variables)

パートナーのプロセスとミケランジェロ現象(P.17)

All I really, really want our love to do/Is to bring out the best in me, and in you, too. *Joni Mitschell, All I want*

<u>パートナーによる肯定化：彫刻家と眠れる人影</u>

パートナーが自己の特定の行動、動機、傾向性を選択する３段階メカニズム

① **遡及選択(retroactive selection)**：自己の持つ特定の嗜好・動機・行動を賞する
⌘ Jerry がクライアント Rod を思いやった行動をとっているとき、Dorothy は愛情を込めて彼の腕に触れることで、Jerry の行動を補強する

② **先制選択(preemptive selection)**：自己が特定の嗜好・動機・行動を示すよう行動する
⌘ Jerry が自己中心的な行動をとろうとすると、Dorothy は Jerry が理想を書いた"memo"をとりだし、思いやりのある行動をとるように導く

③ **状況選択(situation selection)**：自己が特定の嗜好・動機・行動を示しやすい状況を創る
⌘ クライアントとの大事な打ち合わせのとき、Dorothy は Jerry が最も他者に配慮ある行動をひきだせるような方法で、会話をリードしていく

<u>パートナーによる肯定化の特徴</u>

・ パートナーは、理想自己と現実自己を混同せず、理想へ近づけるポテンシャルを認知して、自己が理想に近づけるような行動をとる。
・ 行動は能動的な場合も受動的な場合もあり、故意の場合も偶然の場合もある。そして、必ずしも暖かくて優しいものとは限らない
⌘ Rod の運動選手としての目標を肯定化するために、Jerry はキツイ言葉をかける "今、おまえは単なる金目当ての選手だ。(中略)黙って試合をするんだ。心をこめて試合をしろよ！"
・ パートナーによる肯定化は、意識的に行われる必要すらない(Bargh & Chartrand, 1999)。

⌘ Dorothy は“楽観主義は革命的発見”と考えており、無意識のうちに自分の理想を Jerry に投影して、自分がしてほしいようなことを彼にしている

・ 自己とパートナーの目標の融合の源泉は、個人的な価値観・暗黙の性格理論の一致、自己像の類似などがあげられる

彫り出し過程におけるパートナーの役割

自己の要因と同様に、パートナーの**洞察**、**能力**、**動機**も理想自己の追求に影響を与える(Table1.2)

① **パートナーの洞察**：現実自己と理想自己についての理解
・ パートナーによる肯定化と自己の理想への前進は、パートナーの共感や視点取得、現実自己への知覚 or 行動的注意、自己の目標や理想の正確な理解と正の相関
② **パートナーの能力**：理想自己追求を促進するためのスキルや資源
・ パートナーの有能さと自己統制の強さ、自己の目標追及の補助、理想自己の鍵となるコンポーネントの所有があれば、パートナーによる肯定化と理想自己への前進はより強いものとなる
③ **パートナーの動機**：自己の理想を追求したいという純粋な欲求
・ パートナーによる肯定化と自己の理想への前進派、促進志向、安定型の愛着、反応性と正の相関
・ パートナーが自己の理想追求を“協力してする仕事”と考えて、励まし、調整、条件なしのサポートを与えることも自己の理想への前進を促進する

⌘ Jerry は自分と Dorothy でたちあげた会社を“僕達の小さなプロジェクト”と呼んだ

パートナーによる肯定化と反応性

・ 親密性の対人モデル(Reis & Shaver, 1988)によると、パートナーが反応を示している限り、自己は支持されていると感じ、関係は強化される
・ 成人の親密性モデルにおける反応性は①自己の目標と需要についての理解と正確な知識、②妥当化または自己の目標や欲求の承認、③自己の目標や需要への思いやりのある純粋なコミットメントからなる
・ 反応性は、必ずしも自己の理想を受け入れる形とは限らず、柔軟で、偶発的
・ 理想的な反応性は、①自己の能力、資源、境遇、需用のシグナルの影響を受ける②パートナーの情動状態に感情的な注意を向ける③サポートの中味と与えるタイミングが自己に合うよう調整されている④依存よりも自立が奨励される　という段階をふむ

⌘ Avery は Jerry の目標を理解せず、彼を(彼自身の理想である)思いやりのある優しい男とは見ていなかった。Jerry が彼女に自分の理想を明らかにしたとき、Avery はそれに納得せず、軽蔑と愚弄で反応した。彼がどん底で慰めを求めたときも、それを拒否し、Avery 自身に追及したい目標があると突き放した。一方 Dorothy は、Jerry の目標を最初からしっかりと理解していて、彼を肯定化するために柔軟に振る舞い、理想自己を有効にしていった

・ 筆者らが最近行った研究（自己報告測度・オンライン測度・コーダーの評定を用いる）でも、パートナーの反応性は、ミケランジェロ現象のコンポーネントとして信頼性が高く、影響力の強いものであることが示されている

ミケランジェロ現象と他の自己関連現象との違い (P.20)

パートナーによる肯定化とパートナーによる高揚

パートナーによる高揚：自己に関して例外的にポジティブな行動をとること

- パートナーによる高揚はカップルのバイタリティーをあげ、相手を好ましくみると、関係への満足度が高まるだけでなく、ポジティブな自己イメージも発達する(Murray et al., 1996; Rusbult, Van Lange, Wildschut, Yovetich, & Verette, 2000)。
- 肯定化と高揚とは正の相関を示し、“肯定的な”行動は、“高揚的”ととらえられやすいが、パートナーによる高揚は、規範的望ましさ（同年代・同性の人にとって望ましいかどうか）とも相関
- パートナーによる肯定化（パートナー行動評定と理想自己評定の相関）とパートナーによる高揚（パートナー行動評定と規範的望ましさ評定の相関）を比較した研究と、実験的手法を用いた研究では、パートナーによる肯定化の影響は強かったが、高揚の影響は有意ではなかった(Drigotas et al., 1999; Kumashiro, Wolf, et al., 2003)

※ただし、これは単なる言葉の問題で、定義によっては二つは同じものとしてとらえられる

パートナーによる肯定化とパートナーによる確証

パートナーによる確証：現実自己（または現実自己であるという信念）をひきだす行動

- 人びとは自己概念を裏付けるような社会的フィードバック（確証）を好み、自尊心の低い人はポジティブな評価を嫌う(Swann, 1990; Swann, De La Ronde, & Hixon, 1994)。このような人たちに肯定化はどう作用するのか?
- 効果的な肯定化を行うためには、パートナーが現実自己をだいたい正確に理解する必要がある
- 自己は自分の長所も短所も正しく知覚され、それでもパートナーが自分を愛し、理想に近づけてくれることを望んでいる
- 肯定化（パートナー行動評定と理想自己評定の相関）と確証（パートナーの行動評定と現実自己評定の相関）の比較、現実自己の記述を操作した実験研究、夫婦の縦断的研究での肯定化と確証の自己報告測度の検討のうち、肯定化は全ての研究で見られ、確証は二つの研究で見られた。(Drigostas et al., 1999; Kumashiro, Wolf, et al., 2003; Rusbult, Kumashiro, Finkel, et al., 2003)
- パートナーによる肯定化と確証の間には、矛盾がないことが示された。今後の研究では、二つが加算的に働く可能性を検討することが望まれる

パートナーによる肯定化と自己の拡張

自己拡張：相互依存によって他者が自己に内包され、他者の属性や資源が自己にとりこまれること (Aron & Aron, 2000)

- カップルのバイタリティや自己のwell-beingに影響をもたらすのは、理想に向かっての自己拡張のみであると考えられる。理想に向かっての自己拡張は、パートナーの属性が理想自己の一部であるときに、自己がその属性をモデルとして使用することで行われる。
- ３つの測度（①中心要素の自己報告測度、②inclusion of other in the self 尺度、③パートナーが自己の理想とする性質をもっている程度）を測定した研究の結果、ミケランジェロモデルの要因は①と②の連合を媒介し、③はミケランジェロモデルの要因と①の連合と②と①の連合を媒介した
- 自己と他者の融合は、それがミケランジェロ現象を促進するとき、つまり、自己の理想である属性をパートナーが持つ場合のみ有益

パートナーによる肯定化とピグマリオン効果

- パートナーによる肯定化は、理想自己をパートナーが彫りだしていく過程だが、ピグマリオン効果はパートナー自身の理想をパートナーが彫りだしていく過程
- 自己は自分の理想自己と類似した相手に魅力を感じる(Wetzel & Insko, 1982)
- 自己の理想と合致する属性をもつパートナーは、それを自己の中から彫りだして、理想に近づけてくれる
- しかし、自己報告とオンライン報告を用いた研究の結果、“自分の理想を相手に押し付ける”傾向は、相手にも関係にも悪い影響を与える(Rusbult, Coolse, et al., 2003; Rusbult, Kumashiro, Finkel, et al., 2003)

結論 (P.24) (全訳)

本章では、ミケランジェロ現象に関するこれまでの理論と研究をふりかえった。この現象は、行動確証・セルフディスクレパンシー・相互依存といった、関係的な文脈から自己を理解する際に中心となるプロセスを明らかにする伝統の概念を取り入れている。ミケランジェロ現象は、親密なパートナーがお互いに相手を理想に近づける形で彫りだしていく適合的な相互依存のパターンのことをさす。これまでの実証的な検討の結果、この現象は、パートナーによる知覚的肯定化、行動的肯定化、理想への自己の前進という三つの要因からなっており、それらは互いに予想できるかたちで影響を及ぼしあっていることがわかっている。実証的な検討は、パートナーによる肯定化と自己の理想への前進の二つが個人とカップル両方の well-being に影響していることを示している。最近の研究では、ミケランジェロ現象のプロセスやメカニズムを明らかにすることが目指されており、その中には自己とパートナーの傾向性、動機、行動傾向などが含まれる。それらの知見によって、自己の社会的性質の理解や、相互依存のパートナーへの適応が日常生活の中を形成する方法が明らかになることが望まれる。